昭和二十七年一月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
（通第三十四号）

慈光

第四卷　第一號

目次

南無阿彌陀佛の発見……花田正夫（1）
太子と佛教……福島政雄（5）
聞光抄（春光の部）……清水清吉（11）

南無阿彌陀佛の發見

花田正夫

敗戰後滿六年、日本国民はよく貧しきに堪へ、乏しきを忍むで、文字通り荊棘の道をたどつて来た。幸に講和の曙光を見た新春、戸毎に新調の国旗が掲げられ、朝陽にかがやき朝風になびいて、日本人の心を明るく照らし出して来たことは永い冬の寒さに堪へて梅花一輪のほころびにあふよろこびである。

然し内に顧みる時、我等の前途には重疊たる山嶽が無數に横つてゐる、かてて加へて敗戰後の荊棘の道に傷つき痛められた人心は、到るところに悲劇と混乱をくりひろげてゐる。この年頭、私は「南無阿彌陀佛の発見」といふ一事を提唱する。

発見とは新しく作りだすことではない、遠い昔から存在した眞実を見出すことである。昔、ニュートンは、秋の午後、庭前に落ちた一箇の林檎に驚きの眼を見張つて、そこに目に見えない引力を発見し、やがて萬有引力と力学の基礎をたてた。それまでの学者は、落ちて来る林檎を見ても、それは偶然の自然現象で、わかりきつたこと、極くつまらぬこととして見過して居たのであつた。

詩人は「一葉落ちて天下の秋を知る」といふ。風もなき秋の日、梧葉一葉黄ばんでかそかな音を立てて落ちる、その一葉に驚くところ、そこに天下の秋が見出されて来る。

今や国は敗れ、惨怛たる現狀にあるが、耳をたて、目を見張れば、無數の林檎と紅葉の落下する姿と音とが聞える。即ちそれは日本人全体に行き渡つてゐる南無阿彌陀佛の声である阿彌陀佛の御姿である。

とどけられたる眞実

いやしくも日本人で、念佛を一度も耳にきき、或は口に唱へたことのない人は一人もないと断言してよからう。このことは大いなる驚異である。なみなみならぬ不可思議である。然し煩悩に曇らされた我々は、そのことをあまりにも軽く見過してゐる。耳馴れ雀になつてゐる。曇らされた心、鈍りきつた心、馴れきつた心が、ひらかれて行く時、驚くべき眞実心がそこに見出されて来る。

現に全日本人の一隅に、念佛がとどけられてゐるといふ事実の本源は「重ねて誓ふらくは名声十方に聞えん！」との彌陀佛の重誓の願力による。更に釈迦・諸佛の証誠・護念・勧よ信力による。

なほ千三百余年前、御自ら南無佛と帰依遊されし「日域大乗相応之地」と予言された聖德太子の信力により、下つて源信僧都の「極重悪人唯称佛」と勧め給ひ、「濁世末代の目足なり」と証し給ひ、次で、「たとひ身は殺さるとも念佛の一義はとどむべからず」との法然聖人の勧化がある。更に親鸞聖人、蓮如上人の捨身の伝承があり、外には空也念佛、時宗の一遍上人、或は鎮西、西山の念佛等々、伝々相承されてここに念佛の普及と浸透が現れたのである。

この念佛が全世界に伝承されるにはまだまだ容易ならぬ労苦と歳月があるが、フエニキヤで発明されたガラスが今日我国の台所の窓にまで普及して実用化されるのに三千年の歳月が経過してゐることを思ふ時、順逆の両縁を待つて全人類に念佛の普及される年月も亦推定出来ると思ふ。

ともあれ、我々は現に念佛の普及圏内に生を享けてゐるのである。宝の山に一歩を踏み入れてゐるのである、手を空しくして経つてはならない。

ここに衣裏宝珠の譬を想ひ浮べる。

昔印度に一人の長者がゐた、その長者の臨終に子を喚んで厳重に封をした一つの箱を示して、「自分は近く死ぬるが、將来に思案にこまるといふやうな時には、この箱を開くやうに」と遺言した。

五日発行

その後、孫の時代になつて天災地変の不幸続きでさすがの長者の富も崩れ去つた。とうとう思案もつきて、祖父の遺言通りに、その箱を開くと、中に一枚の古着があつた。沢山の宝物があると信じてゐた孫は失望して、色々と考へた末、祖父の心は古着をつけて日傭か乞食をせよといふ誡めであらうと思ひ込むで、早速古着をきて街々をさまよひ歩いてゐた。

或日のこと、その孫はかねて見知りの一人の老長者にめぐり遭つた。その長者は祖父と無二の親友であつたので事の次第を有態に打ち明けると、急いで馬車から降りた老長者は、古着の隈々まで探し、そこに世にも稀な宝珠が衣裏に縫ひ込まれてゐるのを発見し、孫に渡しながら「お前の祖父の長者が、或時、子孫への遺産として萬金に価する世にも珍しい宝珠を持つてゐるが、それが子孫の一大事の時に役立つやうにと願つて、古着の裏に縫ひ込んで遺すと話されたことがある。わしは今それを思ひ出して古着の隈々を探したのだ」と告げた。長者の孫は祖父の深い眞意を知らずに、乞食せよとて古着一枚を宝物のやうに遺されたのはいかにも恨めしいと思つてゐたことはまことに申訳がないと懺悔し、且は祖父の周到な親切に感泣して、再び家を建てなほした。

今や日本は長者の孫と同様の窮狀にある。然し幸にも眞実なる願の自然の結果として衣裏に無上宝珠としての南無阿彌陀佛が遺されてゐる。私はこの念佛が日本人の全体に耳に口にとどけられてゐるといふ一事に驚くと共に、佛陀成道の日

の驚異のみ声を想ふ。

「奇なる哉、奇なる哉、一切衆生は一大宝蓮華池の如し。或華は未だ蕾堅くして深く池中に沒し、或華はやうやく長じて水上に蕾を浮べ、或華は今や開かんとし、或華は水上高く美事に開華して芳香を放つてゐる。」

私共の眼にも、念佛の華開けて芳香を放たれてゐる妙好人を現に知つてゐる。又謙虚に眞面目な聞法を續けられてゐる人々を見る。或は未だ聞法の勤きはなくとも佛法を大切に思ふ人々、或は葬式とか法事のみに念佛し、或は無関心のなり佛法を偶像崇拜、消局的などとあざける人々もある。然し大体から見て、ほめるも、そしるも皆御縁があるからのことだ。

慈育にひらける心

宝珠を遺されながら宝珠に氣付かなかつた長者の孫も、老長者の力で、その宝珠が見出されたやうに、日本人の心の一隅にとどけられた無上宝珠としての念佛が、よきひとびとの慈育を被つて、遂に心ひらかれて、南無阿彌陀佛の本来の面目としての尽十方無碍の光明海裡に浮び出されるのである。そこに我等の無明の闇が破られ、人間としての根本の願が満足せしめられて、その香りは自然に四辺にただよふのである。

念佛は日本といふ一大宝池に植えられた蓮華の実である。同時に念佛は日本人に與られた大きな謎であり考案である。その謎が解け、眞実の実の花開いたよき人々は、全身全靈を挙げて我等に慈育の御手を延べて下されてゐる。ここによき人の仰を無視して、恰も長者の孫が古着のみに目をとめて乞食をする愚をくり返してはならぬ。念佛の本来の意味は不可思議といふ外はない、我々の浅薄な智で価値判断をしたのでは皆駄目である。唯佛の眞実の智を賜はつたよき人々の仰を、己を空しうして聞く外はない。

私は岡山縣の片田舎の眞言宗ばかりの在家に生れた。だから念佛とは葬式や法事の時に申すものと考へてゐた。ところが岡山の高等学校に入つて池山先生に教育せられるやうになつて、先生の不思議な徳を全校の学生が讃へ慕ふといふ有様であつた。私もその徳にうたれて、「先生は眞の人格者です」と生眞面目に申し上げると、先生は微笑せられながら「池山はからつきし駄目な人間である。それは謙遜ではない、自分でよく知つてゐる。唯この駄目な私を憐れんで下さるお慈悲の念佛を頂いてゐるばかりだ」と答へられた。私は幸にもそして私の念佛に対する概念は崩れて、念佛の徳の不可思議さに驚異の眼を見張つたのである。

又池山先生の無二の信友であつた近角常観先生は、常に「お弥の念佛」といふことを話されてゐた。これは高野の明遍僧都の逸話にちなむ有り難い御法話である。法然聖人御在世の頃、高野山で眞言宗の碩学であつた僧都は或日法然聖人の選択集を読まれ、念佛一つに佛法の一切を攝めてゐられるのを知り、非常に憤られて、佛教は八萬四千の門があるのに、念

佛一門にとりきることは偏執であると見られ、一大論を書いて居られた、或夜、僧都は夢に天王寺を見られた。そこには沢山の重病の乞食が群つてゐる、すると一人の僧があらはれてその一人一人に粥を與へて居る。僧都はあまりの殊勝な僧の姿に心うたれて、側の人に「誰人ぞ」ときかれると「法然聖人なり」と答へた。法然と聞いて、夢が覚めた。そして静かに反省せられるに及び、法然聖人の勧め玉ふのは、重病人へのお粥の念佛であつたかと氣付かれ、自分は学者とし修業者として高野に長年暮してゐるが、すべて徹底したものは一つもない、自分も重病人である、重病人はお粥以外にたすかる道はない。かく氣付かれると共に、自ら念佛の行者となられたのである。

又近角先生は「手織の木綿」といふことを終生くりかへして教へて下さつた。先生は東京に居られて日本中を信仰問題を提唱して東奔西走してゐられた頃である。滋賀縣の御自坊で独り御留守をしてゐられた御母堂から手織の木綿が送られて来た。先生はこれを受け取られて、始めは、近頃のやうに機械工業が発達してゐるのに、何日もかけて、わざわざ木綿を織つて下されたことは有難いが、無駄な苦労をして下されたといふ風に軽く見て居られたが、夏になつて各地を走り廻つて居られると、どの着物も皆汗に汚れて度々洗濯するのでぢきに駄目になつて了つた。その時一筋一筋の糸を大切につむぎ、丁寧に織られた手織の木綿だけは、いくら洗濯しても非常に丈夫であつた。そのことに氣付かれた時、初めて御母堂の御親切が先生の身に沁み徹つた。「自分がよく肥満して人一倍汗かきの体質を母はよく見抜いて、何日かをかけて丈夫な木綿を織つて下されたのか」と、「それを軽々しく考へてゐた、全く申訳がない」といふ風に非常に懺悔せられると共に、南無阿彌陀佛も軽く頂いてゐるが、人一倍煩悩の興盛な私共を見抜かれての佛の限りない御慈悲であつたと深く感佩せられたとのことである。

斯くよき人々のわが身にかけられての悲心切々たる慈育を被つて、初めて念佛はそのまま、生きたみ親のおまことであると信知せしめられるのである。これが南無阿彌陀佛の発見である。発見といへば何だか自分の力で見出したかに思はれ易いが、私の申上げるのは、その発見する力も、限りない佛陀の光明のはぐくみによる、近くはよき人々の御育てによるのである。即ち光明の縁に催されて、名号の因を発見させて頂くのである。

そこに念佛は、十方の国を照して、障碍することなき無量の光明として感佩されて参るのである。右に行くも左に行くも暗、進むも退くも苦、かうした現状の日本に、念佛の花咲き、一大宝蓮華池の実現あれかしと念じつつ年頭の辞を送る然しこれは單なる私の願ひではなく、千三百年来の日本の古聖の切なる願ひであり釈迦彌陀諸佛の本願であると信ずる。

太子と佛教

福島政雄

一、生きた佛教

聖德太子の佛教は、この人生において、生きて血の通ふ教へであつた。太子の問題は、日本国の問題であつた。日本国の実に一大危機における、生か、死かの問題であつた。そこに国家としての苦しみがあつた。その国家の苦悩を双肩に担はれたのは、正に太子であつた。そして、この国家の苦悩を太子の根本生命において解決しようとせられたのであつた。

太子にいたるまでのわが国の歴史には、血を流す事件がつづいてゐた。閥族は互に血を流して相争ひ、それに関連して皇族の間にも血を流す争ひがあつた。その最後は蘇我と物部との争ひであり、蘇我は物部に勝つて專横の権を振ふにいたつたが、その揚句は蘇我馬子が崇峻天皇殺逆事件をひき起すにいたつた。

この事件について日本紀の伝ふるところは不充分であるが女性の問題にその端を発してゐるやうである。即ち、大伴妃が天皇の寵愛衰へ、蘇我嬪が代つて寵せられることに対する嫉妬から出立し、大伴妃は天皇のことを馬子に密告し、馬子はその腹心である東漢直駒を使つて殺逆を敢行した。然るに駒はその間に蘇我嬪を偷んだが、後に事あらはれて馬子に殺された。

このやうなことは実に人倫上の悲しむべき事件であり、殊に日本の国家としては最暗黒の事件であると言はねばならぬ。しかして太子はこの事件から半年ばかりの後に、推古天皇の皇太子となられて萬機を攝せられたのである。この時、蘇我馬子は政権を握つてゐる。萬事は馬子の思ふままになつてゐる。太子は二十歳にして、皇太子攝政となり、この馬子と政をともにせられねばならなかつた。馬子は、太子にとつては叔父君である天皇を殺逆した敵であり、世間普通の考へからいふならば、正に敵討をせらるべきはずのものである。然るに、太子には何等その事なく、三十年の長い間、その馬子と天下の政治をともにせられた。ここに世間普通の考へ方では太子は不可解の人物となる。しかし、ここに太子の深奥なる佛教的精神が感ぜられる。

かやうの場合はおける佛教的精神の態度は如何であるか。それは釈尊が、その分裂して争へる弟子たちを諭された、長寿王長生太子物語におけるが如く、「恨は恨によつて止むべからず、恨は恨無きによつて止むべし」といふことに存する。釈尊か晩年に、毘瑠璃王に対せられた態度も同様である。提婆菩薩が敵に殺されながら、悠々として敵をわが胸におさめ容れつつ死んだことのごときは、もつとも著しいことである。佛教では、これを攝受の精神と称する。

二、折伏と攝受

攝受に対するのは、折伏である。折伏は打つてこらすのであり、攝受はおさめいれて融かすのである。折伏は折伏のみで終るものではなく、必ず攝受に終る。折伏して攝受するのである。太子はこのことを勝鬘教義疏の中に明かに述べられてゐる。

惟ふに、太子が皇太子攝政として馬子と政をともにせられるやうになつてから、およそ十余年の間は、太子が苦しみの中に日本国の問題解決の道を求められたのである。馬子を討伐すべきか誅滅すべきか、これは正に太子における大問題であり、その解決如何は日本国の將来に大なる影響を及ぼす。太子は実にこのことを深く考慮せられたのである。

この苦悩の十余年は、太子が佛典に心をひそめられた十余年であつた。佛典に心をひそめて、この苦悩の問題の根本解決を求められたのである。佛教は人生苦悩の解決をその根本問題とする。太子は、かかる佛教に解決を求められたのである。それは太子の問題であるとともに日本国の問題であつたその解決は日本国の將来の姿を決定する。

皇太子といふ地位は微妙なる地位である。殊に攝政である。それは下萬民に対しては上御一人の御心を伝へ、上天皇に対しては下萬民を代表して萬民の心を上に伝へらるべき地位である。かつまた太子はもつとも濃厚に皇族の血を受けてこの世に生を享けた御方である。もしこの太子が馬子を誅伐する態度に出られたならば、いはゆる歯には歯を、目には目を償ふといふことになり、暴に対するに暴を以てし、血にて血に報ひるといふことになる。さすればこのとき以来、日本国は上下君民互ひに殺し合ひをする国となつたであらう。君民相互に刄をもつて殺傷する、それは佛教の精神に根本からもとるのである。

太子は佛典をよんでこのことを明かに感得せられた。そこで太子は馬子に対して絶対攝受の態度をとられたのである。馬子の娘・刀自子(トジコ)の女郎(イラツメ)は太子の夫人である。故に馬子は、太子の義父のやうな立場にある。年齢も太子よりは二十余年の年長者である。それが朝廷の権力を握つてゐるのであるから、太子の立場は実にむずかしい。この難局に処して、太子はこの年長者である馬子を、佛陀の攝受の下に攝受しようとせられたのである。それは実に難事であつたが、しかし日本国永遠の基礎はここに定められた。太子は日本国に上下君民融々として相和する国の基を定められたのである。すなはちそれは十七條の憲法の制定としてあらはれ「和を以て、貴しと爲す」といふ精神がその第一條を成すにいたつたのである

三、十七條憲法

佛教は佛教といふ特殊の世界をつくるものではない。佛教に徹すれば、萬物が各々その特色を発揮して萬朶の花を開くやうになる。これは太子が深く読まれた法華経の一乘的精神において、もつともよく現はれてゐる。一乘法の精神に徹し来れば、甲は甲らしくなり、乙は乙らしくなる。故に、日本国が一乘法の精神に触れた姿はどうかといへば、日本国が眞に日本国らしくなるのである。太子が十余年の間、勝鬘経や維摩経や、殊に法華経に心をひそめて日本国の苦悩の問題の解決を求められた結果は、太子の生命における日本国の自覚が出現した。それが十七條憲法である。

十七條憲法は、その時代にばかり意味があつたといふやうな一時的の立法の類ではない。リグスゴスの立法や、ソロンの立法などとはその趣を異にする。大乘佛教殊に一乘法の精神から出現した日本国永遠の姿の自覚である、千三百余年前の当時でも、千三百年経過した今日でも、十七條憲法が日本国に対して保持する意義は変らない。近代の西洋の、いはゆる国家の憲法といふやうなものとも異り、世界的、国家的、民族的、宗教的、道徳的自覚を永遠にわたつて示されたものである。

十七條憲法はその條條ともに大切なものであるが、殊に第一條・第二條・第三條・第七條・第九條・第十條・第十二條は輝いてゐる。第一條の和を以て貴しと爲すといふことは、いかなる国家社会にも通ずる国家社会の根本理想である。今日となれば、平和は世界の国家民族が共通に持つ大理想である。第二條の篤く三宝を敬へといふは、世界に通ずる道の根元を深きに求めるのである。根本自覚の問題を明かにせられてゐるのである。

第三條の詔を承けては必ず謹め、とあるのを封建的であるなどと解すべきではない。太子は、推古天皇以前までの閥族專横の封建的社会を打破し、萬葉集開巻第一の雄略天皇の御歌が現はしてゐるやうな、上下融和して春光の照せるが如き国家を念願とせられたのである。故に、詔を承けて謹しむといふのは、国家といふ大家族の中心たる天皇に対する自然の情の美しき発露である。封建的な強圧的なものとは自らその趣を異にする。第十二條はこれをさらに明かにしてゐる。

第七條は理想の国家の姿である。人各々任掌ありといふのは、各人が天よりうけたる使命を重んじ、一乘的精神の下に天下の萬民をして各々その堵に安んぜしめるのである。その理想はプラトンの理想国などよりも、はるかに優れてゐる。聖王の一乘法的精神の下に、国家永久の基礎を堅めようとせられるその理想は、徹底せる佛教の精神から来てゐるのである。

それは佛教の信仰から出て来る。故に第九條には、信は是れ義の本、と宣せられてある。義といふは正しき筋道であり社会正義と考へても宜い。社会的正義といふのは、今日の闘争主義の人々が考へてゐるやうな、ぎこちない人生の姿ではない、信仰の境地から自然に溢れ出る社会の秩序である。社会の人々が、ともどもに永遠のまことの生命に帰依して、和

ぎ合ふところから流れ出る秩序である。

その信仰の内容としては、自己の根本徹見といふことがある。それが第十條である。忿を絶ち瞋を棄てよとある。それは根本の煩悩を自己の問題とせよといふのである。欲を棄てよといふことは、すでに第五條に示されてある。欲と瞋りすなはち、貪欲と瞋恚とは人間の根本の煩悩である。これを棄てよとあるのは、なかなかに、これが棄てられぬ自己の姿を徹見せよといふことである。言葉を換へれば、凡夫の自覚に住せよといふことになる。そこに是非の爭ひは止まねばならぬ。我を是なりとし、彼を非なりとするところに、今日の社会の紛爭もある。その是非の爭ひに執着せず、凡夫の自覚裡に、貪瞋の自己の姿を徹見するところに、永遠の誠のいのちへの帰依の心が出現する、そこにこそ、国家社会の和ぎの出立点がある。

このやうに十七條憲法は、実に日本国の自覚の姿である。佛教の精神はその根底に流れ、佛陀の自覚は、太子の生命を通じて永遠の国の姿を顕現せしめたのである。

四、三經義疏

太子の佛教が直接に佛典研究の上に現はれてゐるのは、いはゆる三經義疏である、すなはち、勝鬘経義疏一巻・維摩経義疏三巻・法華経義疏四巻である。この三經の義疏の中で太子の佛教の特色として見るべきことは、この人生に佛教を生かす氣魄に充ちてゐることである。勝鬘経義疏における折伏と攝受とを註釈して、重き悪は勢力をもつて折伏し、軽き悪は道力をもつて攝受すとあるは、重き悪も先づ勢力をもつて折伏し、然る後に道力をもつて攝受するといふ意味であると思ふ。その勢力といふは武力や権力といふ意味ではなく、身命を棄てて正法を攝受するといふ、法華経にいはゆる不惜身命の力である。いのちがけでやる力である。馬子に対する太子の折伏攝受は正にここに存する。十七條憲法は、閥族に対する折伏の声である、折伏の力は太子の身命を捨てて正法を攝受せられる生命力に存する。馬子はこれに対して何ともする力がなく、結局、攝受せられて行つたのである。

その不惜身命は、帰依より出でる行善の力であつた。行善の義は本帰依にあり、といふ太子の註はこれを証する。しかし太子には不惜身命の折伏を行ふといふ特別の自覚があつたのではない。太子の御生活は、むしろ何等の無理の無い、自然法爾ともいふべき有様であつた。佛教の徹底境には、頑張る力味もなければ、無理もない。義疏に、いはゆる「衆流に冥合して更に異趣なし」といふ大乘の菩薩の境地である。俗塵に入つて俗の姿を示し、少しも俗世間とかはらぬやうな姿をしてゐる。それが太子の御生活であつた。しかも維摩経義疏にある太子の御註語は、太子その人を述べるかのやうに適切である。曰く、「菩薩はことさらに威を現して折伏せんと欲する無し、但し魔は是れ邪見の主なり、今大士の広道を見ては、すなはち自然に恥を懐く」と。馬子は魔であつた。大士すなはち菩薩である聖徳太子の十七條憲法といふ広道の前には自然に恥を懐くといふことにならざるを得なかつた。そ

こに太子の攝受がある。

維摩経義疏には、大無量寿経の第十八願が引用せられてあり、信の一念の問題に触れてゐるが、太子として、特に国家社会の問題の上から心をこめられた経典は法華経であらう。法華経義疏の方便品の十如是を釈せられる條に「愚心及び難し」といふ太子の一語は、正しく十七條憲法第十條の凡夫の自覚を裏付けるものである。太子は一切の閑論議を排して、信の一念に帰趣せられてあるのである。

さらに安樂行品の註釈において、山林に入つて独善的修行をすることを排し、山間に就いて常に坐禪を好むやうなことをしてゐるならば「然らば則ら何の暇あつてか此の経を世間に弘通せん」といふ一大警語を放つて居られる。ここに日本佛教の先覚者としての太子の眞面目が現はれてゐる。誠に日本佛教の本流は隠遁独善の修行の上にあらずじて、活社会の中に入り来つて無碍の活動を行ふところに存する。空也然り法然、親鸞然り、日蓮然り、しかして道元といへども然り、一休のごときは、そのもつとも然るものである。

五、太子の感化

補闕記によれば、三経義疏は太子の三十六歳の四月より四十二歳の四月まで、六年間に完成せられたものである。すなはち、太子は三十台の後半から四十台の初めにかけて、いよいよ深く佛典に心をひそめられたのである。しかして太子に生きてゐる佛教は、愈々その問題の焦点をはつきりするやうになつた。それは太子晩年、日常の語、世間虚仮、唯佛是眞においてはつきりとした焦点を持つやうになつたのである。

世間虚仮とは何であるか、太子の根本問題は最初に述べたごとくに「日本国に即する太子の生命」といふ点に存する。世間とは日本国の国家社会であるが、それが太子の生命に即いて離れぬものであるから、世間虚仮といふは国家社会が虚仮であると同時に、太子の生命そのものが虚仮といふ太子の御自覚である。

顧みれば、太子が二十歳にして推古天皇の攝政皇太子となられてから、すでに二十余年、馬子のことは常住に太子の念中にあつた。馬子は、太子の生命の力に包容されて、さすがに猫のやうにおとなしくはしてゐるが、決して未だ眞人間になつてはゐない。そこに太子の苦悩があつた。佛教の上に眞実道を求めて一意精進すでに二十余年、しかも一人の馬子を感化し遷善せしめることができない。そこに太子の世間虚仮の反省がある。

この語は太子が折に触れて側近の人にはからずも洩らされた言葉である。側近の人と言つても、太子のこの語に真に深く感じたのは橘女王である。女王は太子の従兄、尾張王の御子、惟うに、太子の宗教的信仰をもつとも深く理解した人はこの女王であつた。法隆寺金堂の釈迦三尊と、女王が太子の記念につくられた天寿国曼陀羅の銘文とは、そのことを力強く物語つてゐる。太子は世間虚仮の一語に託して、心の中の無限の感を橘女王に洩らされたのである。

しかし世間虚仮の感とともに、太子の心を充たしたものは

佛陀の真実生命であつた。佛陀のまことは虚仮なる太子の生命を充実した。そこに帰依信順の太子の姿が仰がれる。凡夫の自覚の下に永遠真実なる佛陀の生命に帰依する太子の姿、唯佛是真の語、そこには一切の衆生にひびくべき太子の感化力が籠つてゐる。

この感化力は、太子の御存生中には、馬子に徹しなかつた。そこに太子の世間虚仮といふ歎きがあつた。しかしながら太子の薨後四年、推古天皇の三十四年五月一日、馬子が世を去るに際して、さすがの馬子も、つひに太子の真実精神に感ずるにいたつた。馬子の最後の遺言は次の通りであつた。

「自分が死んだならば、聖徳太子の御前に、自分が跪いて太子様を拜んでゐる絵をかいて、自分の墓の前に懸けてくれよ。」

馬子は自分の臨終になつて、はじめて太子の御恩に氣がついたのである。しかしそれは、日本歴史の上の重要な一事実である。逆悪の馬子が誅伐せられずして攝受せられ、つひに真実生命に融化せられて真人間に立ちかへりつつ世を去つたといふことは、日本歴史の將来を決定する重大な事実である。

太子の佛教はここに徹底的に生きてゐる。日本歴史はその後千三百余年、色々の変転があり、悲痛暗黒の事件も多かつだのであるけれども、その底流には常に真実生命の流れが一貫してゐる。しかして太子は正にその源流に立たれてゐるのである。徳川時代から今日にかけて太子を非難する人も多いが、それは人生のこと、国家社会のことを残薄な形式主義をもつて律じようとする人である。太子の真実生命は、それらの非難を越えて高く輝いてゐる。

太子の佛教は円頂黒衣の佛教ではない。いはゆる寺院の佛教ではない。僧侶が如何に無力になつても、寺院が如何に葬儀と法要との形式的事務所となつても、太子の佛教は、厳として日本国民の生命裡に生きてゐる。その太子の佛教に自覚的に参加する国民の存するところ、日本国は如何に悲痛の有様にあつても、必ず將来において復興して来るに相違ない。これ正に太子を仰ぐわが国民の念願であり、期待である。

昭和二十四年、四月八日稿

墨汁一滴より

子規居士

自分の俳句が月並調に落ちては居ぬかと自分で疑はるるが何としてよきものかと問ふ人あり。答へて云ふ。月並調に落ちんとするならば月並調に落つるがよし。月並調を恐るると云ふは善く月並調を知ぬら故なり、月並調わ監獄の如く恐る可きものに非ず、一度其中に這入つて善くその内容を研究し而して後に娑婆に出でなば再び陥る憂無かるべし。月並調を知らずして徒に月並調を恐るるものはいつの間にか月並調に陥り居る者少からず。

聞光抄

故清水清吉

春光

幸なるかな、今如来の慈光に遇ひ奉り、心の底より湧き出づる歓喜に、かたくなの煩悩の氷いつの間にやら解け初めてここに心の春を味ふ。人間に生れて、心の春に遇はずして空しく終るは、実に心残りのことかな。

心の春！そは無量寿の生命にして、永遠に生くる道なり。過去久遠、未来永劫の限りなき時の間に、芥子粒にも譬へつべきこの人の世をして、最大の価値ならしむるは何ものぞ。学問か、あらず。位階か、あらず。金か、あらず。健康か、あらず。心の春にめぐりあふ唯々一つの道あるのみ。なぜなれば、前者はすべてこれ無常のものなればなり。

○

花が咲いた。天地すべてが花に覆はれてゐる。人々は、その花に醉うて浮かれてゐる。なぜに人々が花に醉はずにはをられないのか。

さうだ、花の徳は、人々を醉はせずにはおかぬのだ。花の徳に触れる、それがおのずから醉ふことになるのだ。

理論や知識では、味ふことが出来ぬ。「ただほれほれと、彌陀の御恩の深重なることを、常におもい出しまゐらすべし。」この境地は、触れる世界にのみ與えられる境地である。

触れるといふ体験は、言葉でも、文字でも表はされない。私にとつてみ光に触れさして頂くことの一番手近かな道は、お念佛の生活にいそしんでをられるお方の御生活にぢかに触れることだ。

○

花！花！花！野も、山も、里も、花に埋れてゐる。年々に見る花ながら、いよいよ忍苦の時代に見る花はまた格別の味がある。

風雨を冒し、寒冷を忍んでこそ、ぱつと開く。「大いに伸びんと欲すれば、先づ大いに屈せよ」といふ。まことに然り自由の天地に至るには、まづ忍辱の道を踏まなければならぬ。忍辱を担否して、自由の天地に出でたりと思ふのは、これ放縦の生活である。赫々たる自由の天地は、実に忍辱より生ま

○

無色の太陽の光線にあたると、すべてのものが各々の個性の色をあらはす。ここに百花撩乱の世界が展開せられる。無色とは色のないことではない。すべての色を包含してゐることだ。抱くとは「自我」の主張ではない。相手の個性や立場を理解して、そこに一色となつて涙をそそぐ世界だ。

相手を理解して涙をそそぐ世界は、自己に目覚めさして頂くところから生れる。自己の値打に目覚めずして、いかにして相手を理解し得よう。自己の値打を知るには、自己のすがたを、鏡にうつさねばならぬ。

いやとつくの昔に、如来様は先手をかけてうつしてをられるのだが、煩悩の雲霧に閉ざされて見えずにをつたのだ。今、大願業力の御催しにあずかり、はじめて見る己がすがたのあさまし、あさまし。仰がんかな、大悲弘誓の本願力を！

○

み光に照らされて、脚もとを見さして頂くことになつてみたら、なかなかに苦しい。それも駄目、これも駄目、それも出来ず、これも出来ず。そしてあまりの切なさに聞かぬ昔がなつかしいと、つひ愚痴もこぼしたくなる。

しかしよくよく案じみれば、苦しいとか何とか思うてゐるのは、我慢の世界で、み光に照らされたすがたを、そのまんま信頼してゐるのではない。信頼の世界には、我慢がなく、従つて疲れること、苦しむことがない筈である。

○

光を聞くこと、即ち光を聞き得たといふ世界から、過去を振り返つて見たとき、私の経て来た道は、すべて私にとつて一本道だつた。すべつたことも、ころんだことも、すべてが光を聞き得るまでの道程だつた。かう氣付かせて頂いたときに過去のすべてが意義づけられる。

光を聞き得たことによつて、現在が尊くなり、過去のすべてが意義づけられ、従つて未来に起る問題が、みな如来道への精進の糧なるを思つたときに、はじめて人生に大いなる意義が感じられる。

光を聞く世界以外に、どこに人生の意義があらう。心から満足せしめられるのは、物の世界においては不可能といふ結論より外にない。唯々心の世界あるのみと、しみじみ味はされる。

○

今日は四月八日。大聖釈尊の御誕生日。

ひとり湯のたぎる音を聞きつつ、春の庭を冥想す。

唯我独尊！何といふ生き生きしたお言葉だらう。釈尊のこの世に生れませし最初のみ声を思ひ出すたびに、自分の生活

が真底からお愧かしくなる。自分みづからが、暗い世界を作り、強いて小なる自分としてみづから卑しんで、狭い世界を作る、何とした情ないことであらう。が、しかし幸なるかな この情ない自分を目当として叫んで下さる尊いみ法を心に頂き、み佛のみ心を身に沁みて感佩する時、俄然、いやしき自分ながら、そのままに有難き身にさせて頂く。

唯我独尊！さうだ、み法が通うて下されたればこそ、雄々しく立たして頂けるのだ。さればこそ、かく雄々しく叫ばれたお言葉が、み法の賜によつて深く味はれる。

地上は今花の盛り、世尊の御降誕を祝するが如く。

○

願ひ、眞実の願ひ。それは、私にはなかつたのだ。目先の問題やら、順境やらに障へられて、なかなか眞実の願ひを見付け得なかつたのだ。

その願ひを、私に代つて成就して、それを私に受取つてくれよと願つて下されるのが佛様だ。思へは私は、願ふ身にあらずして、願はれてゐる身であつた。

小鳥は、チチと囀つてゐる。松は、緑に生き生きとしてゐる。そこには何の矛盾もない。だが私は、毎日の生活の上で、いつも逆にばかり歩みたがる。そしてそこ[illegible]また、真理を求める心が止まぬ。

平和な心、それは、真理に順応した心。自然法爾の世界、それは理想の世界だ。

○

覚者の救ひのお目当は、ハテ何ものであつたらう。智者であつたか、善人であつたか。いやいや愚者であつた、悪人であつた。それにもかかはらず、智者になり、善人になつたやうな氣のするときに救はれたやうな氣になり、愚者となり悪人になつたときは救ひから洩れてるやうな氣持になる。実に愚かしいことだ。

口伝鈔に曰く。然るにわが心凡夫けもなくば、さてはわれ凡夫にあらねば、この願にもれやせんと思ふべきによりてなり。然るに吾等が心、すでに貪瞋痴の三毒皆同じく具足す、これがためとて起さるる願なれば、往生その機として必定なるべしとなり。

何回となく、読み返し読み返しすればするほどいよいよあぢはひの深くなるを覚へ、且つわが身の幸ひを喜ばずにはをられない。そして私が愚者であつたことが、またとなく有り難い。私が悪人であつたことが、またとなく有り難い。

○

春光うららかな時は、お念佛もなだらかに出て、これも阿彌陀佛のおかげ、あれも阿彌陀佛の御方便と有り難く味はさ

して頂いてはゐるが、一度利害打算の末、お互の感情（[illegible]）黒雲が巻き起ると、とんでもない怒濤が逆巻いて、何もかが判らなくなり、無我無中になつて果てどもなく悩む

不思議や、その悩むすがたを明瞭に見るもう一つの自分があつた。「悩む根本はこれではないか、何と呆れたお前ではある。それが判らぬのか」と叫ばれる。ただ事ではない。何としたお働きだらう。

だんだん明瞭になるにつれて、いよいよこの私が、如来様のお目当であつた。誰でもない、ただ一人のこの私が目標とされてあつたのだと氣付かされた時に、ただただ広大なお慈悲の程がおがまれる。

病床六尺より

子規居士

左千夫曰ふ、柿本人麻呂は必ず肥えたる人にてありしならむ。その歌の大きくして逼らぬ処を見るに決して神経的痩せギスの作とは思はれずと。節曰ふ。余は人麻呂は必ず痩せたる人にてありしならむと思ふ、その歌の悲壯なるを見て知るべしと。蓋し左千夫は肥えたる人にして節は痩せたる人なり。他人のことも善き事は自分の身に引き比べて同じ様に思ひなすこと人の常なりと覚ゆ。

斯く言ひ爭へる内左千夫はなほ自説を主張して必ず其肥えたる由を言へるに対して節は人麻呂は痩せたる人に相違なけれども其[illegible]格は強く逞しき人ならむと思ふなりと云ふ。余は之を聞き[illegible]し思はず失笑せり。蓋し節は肉落ち身痩せたりと雖も骨格は発達して腕力は人に勝り[illegible]て強し。されば人麻呂をも[illegible]に引き[illegible]合せて想像したるなるべし。人間はどこまでも自己を標準として他に及ぼすものか。

餘興　法座春の福引

○ 佛様の救済（衣紋竹）まる裸になつたとき用がある
○ 百八の煩悩（干物はさみ）なかなか離れぬ
○ 大悲の御親切（孫の手）かゆいところに手がとどく
○ 片仮名の御名号（帽子かけ）坊もかける
○ 佛様ハ御救ひにあへば（オロシ金）極重悪人とひき下ろされる
○ 凡夫の生活（ツノベラ）腹をたてて業を作る
○ 聽手上手（コツブ）腹を空にして彌陀の法水をそそぐ
○ 浮ツ調子の聽聞（茶筒）茶々を入れる
○ 信仰生活（スリツパ）右も左も苦にならず
○ 如来大悲の恩德は（粉歯磨）身を粉にしても報すべし

聞光誌より転載

編集後記

念佛裡に新春を祝ぎ奉ります。よき師の護念力と読者の皆様方の御援助によりまして、第四卷第一号を御送り申上げ得ますことは、御礼の言葉も見出し得ない感激であります。ただ厚く御礼を申し上げます。

昨年の正月は朝鮮の戰線も激しく、対岸の日本もどうなることかと案じて居りましたが、本年は休戰の交渉も進められて、暫時の安堵を覚えました。然し日本自体の歩みの上には重大な問題が未解決のままに残されてゐます。英国の耐乏生活の声は、きびしい現実を教へて居ります。私共はかうした世界の波濤をうけつつ、日の本の国としての本来の面目を発揮すべき大切な年となりました。称名念佛裡に無量の光明と無限の慈悲を頂いて、今生海山の御恩の万分にこたへつつ、浄土への旅をつづけさせて頂きませう。

▼「太子と佛教」の福島先生の御原稿は聖德太子奉讃の「世界佛教」誌上に記載せられたものでありますが、特に先生の御許しを得て転載させて頂きました。大暗黒裡の現在、太子の眞面目に接し、私共の進むべき道を太子に聞き奉り、新春の出発とさせて頂き度いためであります。先生の御住所は、横須賀市船越谷戸六六二番地であります。

▼「聞光抄」は春・夏・秋・冬とありまして漸次記載させて頂いて、盛岡市の景勝人、故清水凡秀居士の信德に浴させて頂きます。特に本抄は盛岡市三十軒六十番地の高人氏のた聞光誌が、凡秀居士の編集発行せられて盛岡氏は長く凡秀居士の慈教に接して居られ、から抄せられたものであります。居士の死後、大病を縁として深く佛心を頂かれた方であります。凡秀居士の顯彰を唯一の念願として居られる教育者であります。

▼「念佛の発見」は年末以来、私の胸に往復してやまぬことどもを誌しました。宇宙に一歩も及ぶ圏内に生を享けた私共は、宝の山です。とすでに足を踏み入れてゐるのであります。縁にもどけられた念佛の眞意を発見下さる時は、然なれかしと念じて年頭の筆をとりまして頂きし書きつくせないので次号に続けさせます。

社告

段々物価が上りますので、誌代を、左記通りに定めました。御諒承願います。

定価
一部、七円也（送共）
半年分、百円也（送共）
一年、金二百円也（送共）

尚ほ御送金頂くには、振替を御利用下されば御便利と存じます。又四円切手で御送り下されても結構です。

花田記

昭和二十七年一月十日 印刷
昭和二十七年一月十五日 発行
毎月一回十五日発行

定価
一部金拾七円（郵税共）
半年金百円（郵税共）
一年金二百円（郵税共）

名古屋市南区駅上町二ノ二八
編集兼発行人 花田正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人 本田政雄

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所 千草印刷所

名古屋市南区駅上町二ノ二八
発行所 慈光社

振替口座番号 名古屋一〇四七〇番

慈光 第四卷第一号 昭和二十四年七月一